

# 戦後の育児書に見る育児方略

—— 昭和 40 年代前半を中心に ——

大塚 健 樹

## 1 問 題

大塚 (2002、2005) は、『戦後の育児書に見る育児方略—昭和 30 年代前半を中心に—』と『戦後の育児書に見る育児方略—昭和 30 年代後半を中心に—』で、第二次世界大戦以後に噴出してきた日本の子どもを取り巻く社会問題について育児書を手がかりに検討している。検討の手法として、「幼稚園・保育所・学校」と「家庭」の関係の中でどのような子育てが行われてきたかを時系列に沿って検証している。

先にあげた前者の論文では、民主主義が社会に浸透し始め、その社会を背景に育児におけるしつけ、学校における教育が自主性を持った子どもを育てる方向に転換し始め、その担い手が母親中心へと移行していくことを指摘している。それまでの育児は、祖父母や父親も含め、家族全員で子育てをするというものであった。それが、昭和 30 年代の初め頃を境に、母親中心の子育てへと転換していった状況が述べられている。この育児方略の転換により、すでにこの頃から育児へのプレッシャーが形成されていることが指摘されている。学校教育と家庭との関係においては、高度経済成長期に入ったことにより、能力主義、エリート主義が教育の方向性として打ち出され、家庭においても教育への関心が高まりはじめた転換期であることが見いだされている。

後者の論文では、昭和 30 年代前半の子育て方略における転換期を受け、子育てがどのような方向へ進もうとしているのかが指摘されている。それは外国、主に欧米の子育てを「科学的な子育て」をキーワードとしながら紹介し、それらの知識を積極的に吸収しようとする母親が出現したことを見いだしている。そのような母親達を「心理学ママ」と呼び、子育ての方向が

明らかにそれまでの時代とは違ってきたことを指摘している。その一方で、そのような子育てに警鐘を鳴らし、伝統的な子育てへの回帰を訴える育児書が存在していることも指摘されている。そうした中で、現代の問題にも通じる、地域格差の問題、早期教育に対する警鐘、反抗する子どもに戸惑う母親、育児ノイローゼになる母親の問題などを論じる育児書が見られることが見いだされている。

本研究では、前述の論文を受け、昭和 30 年代の子育て方略の流れが、昭和 40 年代前半にどのように影響を与えているかを検証することを目的とする。なお、内訳は後述するが、分析する書籍の分量を鑑み、今回は昭和 40 年代前半のうち昭和 40 年から 42 年までを分析する。

## 2 方 法

本研究では、前回同様南館省一氏が所蔵していた育児書 550 冊のうち、昭和 40 年から 42 年に発行された書籍を分析対象とする。分析対象とした書籍の内訳は、昭和 40 年 8 冊、同 41 年 9 冊、同 42 年 15 冊の合計 32 冊である。これらの書籍から、これまで同様、育児に関する社会的背景を踏まえ、その背景と育児方略との関係について概観していく。

## 3 結果と考察

昭和 40 年代に入ると、昭和 36 年に文部省(現文部科学省)が始めた「全国一斉テスト」の影響を受けた家庭の問題を指摘した著書が多く見られるようになる。それらの著書を中心に、昭和 40 年代前半の育児書で、子育てに関する問題についてどのような指摘がなされているのかを探っていく。

## (1) 昭和40年

「全国一斉テスト」の影響を受けた家庭の問題について、親子関係のあり方を各界著名人に論じさせた『家庭はこれでいいのか』（1965、伊藤昇編、有紀書房）には、当時の教育熱の背景について次のように述べられている。

——その次の「教育過剰」は、親だけに責任があるわけでは、むろんない。最近のように、有名学校への入試地獄がいよいよ残酷性を加えてくる一方で、文部省の全国テストなどが、こんにちの児童、生徒を、テスト・ノイローゼに追いこんでいることを、わたしたちは見のがすわけにいかない。けれども、家庭の親が、子どもたちの尻を勉強、勉強で追いまわし、家庭教師だ、学習塾だとさわぎたてて、それがほんとうに、子どもの幸福、ひいては、家庭の幸福になるのであろうか。

その「強制学習」に、曲がりなりにもついていける子どもは、それでよかろう。けれども、その数は、そんなに多くないはずである。もし万一にも、親の教育過剰、有名学校病についていけない場合、親の失望と期待を知っていればいるほど、その子どもは、誤った道に、すべり落ちないともかぎらないのである。そんなときの「家庭の不幸」は、想像するのさえ恐ろしいのであるが、その責任は、親が背負わなければならないのである。——

この記述は、編者である伊藤昇が最初の章で述べたものである。当時の背景は、大塚(2002)によれば、昭和33年の「スプートニック・ショック」以降、教育界では知識重視、管理教育が進み、その反動で昭和30年代後半から「落ちこぼれ」が問題となり、昭和40年代に入るあたりから「校内暴力」、「校則の強化」、「体罰」などの問題が噴出した時期であるという。この記述は、まさにこの問題の背景を指摘していると思われる。その後、この書では、評論家や会社社長など各界の著名人が、家庭教育の在り方について論じており、それらの中で指摘されている家庭の状況に関する諸問題は、次のようなものである。それは、「教育ママの家庭から非行少年が出る」、「貧しさゆえの非行少年もあとをたない」、「離婚は年々多くなる」、「安住の場を失っ

た老人がないている」といったことである。

また、親子の関係性のあり方について、戦前とこの時代とを比較しながら「非行少年」、「心理学ママ」について論じた『愛ときびしさの家庭教育—欧米から見た新しい父母の条件—』（1965、野瀬寛顕、あすなろ書房）には、次のような記述が見られる。

——明るい家庭を作るうえに、いちばんたいせつなことは、なんといっても親と子の「心のつながり」を、お互いに、しっかりもちあうことです。

親子の心のつなぎ方、これは時代によって大きく三つに区別されるように思います。そのひとつは、戦前の時代に多く行われたもので、子どもの心を親にひきつけるやり方です。つまり、親を子どもの心のよりどころにした時代で、親の思うとおりに子どもの心をうごかす、それが家庭教育のいちばんたいせつなことでされていたのです。したがって、この時代には「親のいいつけ」が守られたら「ほめ」、守られないときは「しかる」といったやり方が家庭教育の骨子になっていたのです。ですから、いわば父母中心の家庭といえるやり方でした。

ところが戦後になりますと、そのやり方が根本からくずれて、まったく反対の方向に進む傾向があらわれてきたのです。それは、「わたしのようなのは、とうてい子どもの心をひきつけるだけの力はありません」と、子どもに対する親の自信喪失と、いまひとつは「親の心にひきつけるよりは、子どもの心にとびこむべきではないか」という、おとなから子どもを解放する立場をとるのです。ですから、子どもの心をつかむには、心理学という勉強もしなければならないといったことになり、いわゆる「心理学ママさん」がでてきたわけです。

前の親の心にひきつけるやり方が、昔ふうにもせよ「きびしさ」のあったのにくらべて、反対に子どもの心にとびこむやり方は、うっかりすると、子どもをあまやかすことにもなりかねません。そこで、こんにち、家庭でも学校でも、とにかく、おとなが子どもに遠慮したり、子どもの言うなりになって、そのあげ

く、社会でも家庭でも、「子どもに対するおとなの責任」というものが、ふたしかなものになっているのではないのでしょうか。……中略……もちろん、親が子どもの心をつかみ、その心のなかにとびこんでいくことは、新しく明るい親子関係をつくるうえに忘れてはならないたいせつなことです。問題は、とびこみつきりになるというところに「甘えっ子」をつくったり、「わがままっ子」をしでかしたり、ついには「不良」を出す原因にもなるわけで、親の子どもに対する対し方を根本的に考え直す必要があると思うのです。——

この記述から、当時子どものことを理解する必要性の背景と、その理解する方法として「心理学」が用いられた状況が理解できる。

このような家庭の状況を受け、子どものしつけ方や子どもの発達診断を解説した書籍も見られる。それは、『子どものしつけ』（1965、早川元二、国土社）、『人間形成ある家庭』（1965、毎日新聞社編、光風社書房）、『性格の診断』（1965、佐野勝男、現代心理学ブックス）、『乳幼児精神発達診断法』（1965、津守真・磯部景子、大日本図書）などである。

また、家庭の現状を踏まえ、集団教育の必要性を指摘した書籍も見られる。それは、『私の幼児教育論』（1965、松田道雄、岩波新書）である。その書籍の前文に次のような記述が見られる。

—— 幼児教育は、日本では、まったく新しい視角から見なおされねばならぬ。

家庭のなかだけで幼児をそだてられた時代があった。幼児は親の監視がわずらわしくなれば家をとびだし、道で鬼ごっこをし、空地で遠くから集まってくる友だちとあそんだ。

子どもの緊張とリラックスとは、その自由な環境のなかで、自然に調節されていた。

ところが、いまは、まったくちがう。

自動車の洪水は、道路から子どもを追い払い、空地の「利用」があそび場をうばい去った。

子どもは終日、家のなかに軟禁され、母親の監視のもとにおかれる。母親は、家庭労働の電化で得た余暇のすべてを「育児」に打ちこむ。母親と子どもの緊張関係は、ゆるめら

れるときがない。三歳に近づいた子が、「反抗期」といわれるのは、緊張によるエネルギーの高まりを発散させているにすぎない。

男性優位の社会に絶望して家庭にかえる母親や失業して家庭にもどる母親がふえて、緊張関係がひろまるのに、「母親が子どものために家庭にかえれ」という声はたえない。

子どもには、あそべる空間とたのしい友人とが、ふたたびあたえられねばならぬ。

幼児のなかには、あそべる空間とたのしい友人をもっているものがないではない。皮肉にも、「家庭にかえる」ことのできない母親の子どもたちだ。彼らは、保育園にあずけられて母親のむかえに来るのを待っている子どもであった。

だが、この保育園に新しい型の保育者たちがあつまってきた。母親を待つ子の集団を、たのしくあそぶ集団に変貌させはじめた。かつて、他人の幼児をあそばせるのは子守であったのが、いまは、教育者としての自負をもった保母にかわってきたのだ。

家庭では教育できないことを教育する場としての保育園が生まれたのだ。あたらしい学問としての幼児教育が求められはじめたのだ。それは、小学校の教育や幼稚園の教育の程度を低くしたものではない。

理性の十分に開花しない「情緒」的存在としての人間を、何を目的として、塑型すべきかが、塑型そのものの可能性をふくめて、問われているのである。——

この記述から、家庭だけでの育児の行き詰まりという状況を踏まえ、幼児教育の新しい方向性を示さなければならなかった、この時代背景が読みとれる。また、幼児期の集団教育における人間関係の重要性が、この時にも強く意識されいたことも示している。特に、遊びが幼児期の教育の重要な柱として認識されている点が、注目される。今日の保育の原点である遊びを中心とした保育観が、既に示されていたと言える。

## (2) 昭和 41 年

前述の昭和 40 年と同様に「心理学ママ」の要求に応えた書籍として、『子どもの性格づくり』（1966、早川元二、主婦の友社）が挙げられる。

また、「三つ子の魂百まで」をキーワードに三歳までの育て方の重要性を論じた書籍として、『0～3歳ママたちはこうして育てた』（1966、阿部明子、童心社）、『2、3才児の教育』（1966、一甲絹子著、黎明書房）、『三歳児』（1966、園原太郎・黒丸正四郎、日本放送協会）、『幼児の生活としつけ』（1966、小林重順・星野三雄、鳳山社）が挙げられ、共通しているのは性格形成としつけによる行動形成は三歳までが重要であるということである。これらの書籍は、やはり「心理学ママ」の要求に応えているのではないかと思われる。

「三つ子の魂百まで」と言われて三歳が発達上の転換であるということについて、例えば『三歳児』では、次のように記述されている。

—— これまでいろいろと述べてきましたように、三才という年令は、昔から「三つ子の魂」とか、「第一反抗期」などいろいろの名で呼ばれているにふさわしい、一つの大きな成長の転換期だといえます。……中略……このように、三才児とは、「赤ん坊」時代から「幼年期」への転換期ですから、いわば精神的に依存しきっていた母の胸を離れ、やがて保育所や幼稚園など、「幼児グループ」の社会へと巣立ってゆくための「心の離乳期」だといえましょう。その意味で、三才児の中心問題は、いかにして上手に母子の心理的離乳をとげさせるかという点にあるといえます。赤ん坊時代に依存しきっていた母親の心理的庇護から次第に独立してゆくことが、子どもの側からいえば、その子の「自我のめざめ」であり、こうして自我が樹立されることが、とりもなおさず幼児たちのグループの中の一員として、仲間入りすることのできる根本的資格でもあるからです。三才児がこのように「赤ん坊時代」から、「幼年期」へと脱皮する時期にあるという意味は、以上の各章にくわしく述べられたように、その反抗的姿勢にも、創造的知恵の芽生えにも、ことばにもすべてにはっきりと表現されているといえましょう。それはまさに、「三つ子の魂」ということばにふさわしいものです。

およそ教育で、常に留意しなくてはならぬ点は子どもが一つの成長過程を終わって、次

の発展へと飛躍するとき、来たるべき次の成長過程への準備をしてやらねばならぬということです。……中略……このように、考えると、「子育て」ということは、実は育児の技術の巧拙の問題でなく、育てる責任をもつ親の側の心の安定ということが、いかに大切かということがわかります。ことに、三才を迎えるころとなると、子どもの自己主張に親としてもはじめて、ぶつかるので、少しでも不安を内在している母親は、ますます不安と混乱を来して、それが子どもの心に反映し、事態がますます悪化します。三才児をもつ母親ほど、「心の衛生」の大切な人はないといってよいでしょう。——

また、『2、3才児の教育』では、次のように述べられている。

—— 近頃三才児の教育の重要性が多くの人々に唱えられるようになってきました。ある人は三才という時期は、子どもがおとなの教えをすなおに受け入れる時期である。それゆえにこの時期にしっかり教えることが、四才になってから教えるよりもはるかに効果がある、だからこの時期の教育がだいじなのだ、と言っております。

ある者はまた、三才はしつけの上からたいへんだいじな時期である、この時期しっかりしたしつけをしておくことが、人の一生を支配する人格の基礎づけになる、だからこの時期はだいじなのだと申しております。

いずれももっともな意見ではありますが、わたくしどもから見れば、二才三才という時期は子どもの自我形成のはじまる時期である。この時期の子どもはおとなのいうことに従う傾向もあるが、ときに自分の意に染まぬことがあれば、イヤと言って断然拒否する。ここにはっきりと自我の現れが見られるのですが、それもただ頑固に拒否しつづけるのでなしに、自分の置かれた環境に適応することこそだいじな、必要なことであると分かったら、これに適応する態度を取るようにもなって参ります。……中略……この時期は、知恵をつける、知識を教え込むために重要であると考え、る以上に、生活の基本的な態度を身につける、

この意味でだいじな時期であると、わたくしどもは見ております。この基本的な態度ができてこそ、知識を求め学ぶ正しい態度もできてくるものと思います。早く教え込んで“りこうな子”をつくるのが、決してその子の人間としての幸福な発展に役立つものでないことは、多くの事実がこれを証明しております。

しつけということについても同じことです。それは決しておとなの考えている型をおしつけることではありません。子どもの自然の発達に応じて生まれてくる子どもの要求が、外界の状態に応じて、それが通ったり通らなかったりする。そこを子どもは、自我の力によって、うまく調整し適応してゆく。そこに生活の基本的な態度はできていく。そこでこうしたよい態度が身につくように導いてゆくことが大切なのです。これがしつけであると思います。

このような意味での生活の基本的なよい態度を身につけさせる育て方が、誕生以来三才までの間になされるならば、それは人の一生を貫く人格の基礎となる。このことは、今日の心理学ないし精神分析学の明らかにしている通りであります。――

このように、三才までのしつけや育て方の重要性について述べているのは、昭和30年代の書籍にはほとんど見られず、この昭和40年代初めの書籍に見られる特徴である。

さらに、この年の書籍には幼児期の遊びの重要性を論じているものが見られるようになり、これもそれまでにはほとんど見られなかったこの時期の特徴である。なお、それらの書籍は、『幼年期』（1966、勝田守一・山住正巳・松田道雄、岩波書店）、『幼児期の基礎能力の育てかた』（1966、松井公男、誠文堂新光社）、『幼稚園と家庭よい子を作る遊び』（1966、伊東孝位、白眉学芸社）である。これらの書籍に共通している論点は、『幼児期の基礎能力の育てかた』の「はじめに」にみられる次のような記述が示すように、教育熱に対する警鐘である。

――だれでも、愛児をかしこく育てたいと願わないひとはいないでしょう。ところが、い

ざとなると、どこから手をつけてよいかわれこれ思案しているうちに、幼児の成長のほうがさきになってしまつて、「しっかり、べんきょうしてね」とあとからみまもるばかりであつたり、いわゆる“教育ママ”流にテストでこまらせる、ということになりがちのようです。わたくしども幼児を保育するものにとつても、じつに、むだな時間、むだな心配がおおいようにもかんがえられます。

そこで、幼児にもっとほんとうの力をつけていけるようにおかあさんたちには、これだけは知ってほしい、ということがらをとりあげました。三歳から小学校にはいるまでの年齢の子どもたちの教育について、できるだけ実践的な話しをしていくつもりです。

教育というものは、インスタントにきくものではありません。“三つ子の魂百まで”ともいわれ、一生を左右するともいわれる、たいせつなこの時期に、しっかりと足を地につけた、ほんとうに子どもの将来のための教育を、どのようにしていけばよいかが、わかつていただけたらしあわせにおもいます。――

### (3) 昭和42年

この年に出版された『子どもの心とからだ』（1965、高木俊一郎、創元社）の冒頭に次のような記述が見られる。

――彼女は三歳です。……中略……この母親の育て方は全く行きとどいたもので、非常に清潔で行儀がよいのです。手を洗わないと食事をとらないというところまでは結構なのですが、最近では母親の与えるお菓子も「これはどこのお店で買ったの？パイキンはついていないの？」とたずねるしまつです。ちょっとでも汚い感じの店の品などは手にもとろうとしません。

私はこの子に“心配係さん”という名前を呈上しました。こんなによく教育されたことには感心しますが、これではきゅうくつで思いやられます。――

昭和20年代後半から昭和30年代は、大塚(2002)が指摘するように、「科学的育児」が提唱された時代であつた。その影響として極端に

清潔を意識した育児も行われ、上述のように「心配係さん」と呼ばれるような子も出現してしてきたようである。この書の他に、子どものからだの問題を取り上げているものとして『身体とくせ』（1965、鈴木清・品川不二郎・宮城音弥、明治図書）がある。さらに、この『子どもの心とからだ』では、小児喘息の問題を取りあげながら、「おばあちゃん子」の問題も次のように述べている。

——小児喘息といわれてきた子どもがありました。……中略……特に祖母が神経質で、ちょっと寒くてもすぐ厚着をさせようとしします。偏食もひどく食も細く、母親や祖母を手こずらせてきました。……中略……さて退院した日、家族一同王女様をむかえるように大歓迎しましたが、その夜もと通り祖母といっしょに寝ましたら、早速はげしい発作が起こったのです。「せっかく良くしていただいたのにもうしわけない……私にはこの子を育てる自信がないから、いっそのことおばあちゃんと一緒に、しばらく田舎へあずけたらどうでしょうか……」と母親は申しました。

それでいろいろたずねてみますと、母親はこの子に対して、自分を苦しめている——という感じから、何と手のかかる子だろう、いやな子だ——という気持ちにまで発展しているものがあることがわかったのです。つまり、子どもに対する嫌悪と、本能的愛情の板ばさみの状態でした。そこで、祖母にはすぐ田舎へ帰ってもらいました。また母親が自分でこの子の世話をし、母と子の感情の交流をはかるように説得しました。

この子のばあい、生まれつき過敏なたちで病気がちでしたので、過保護の養育を受けた結果、欲求不満を起こしやすい傾向になっていました。一方母親もからだが弱く、この子の世話はかなり負担になっていたようです。

この例は、昭和 30 年代の育児書が祖父母に任せてはいけないと指摘した内容のものとすこし違うかもしれないが、母親が子どもを育てにくくしている原因を祖母の関わりに求めている点で、その根は同じではないかと思われる。そ

して、その解決策として祖母を子どもから遠ざけ、からだが弱いにもかかわらず母親自身が感情の交流をはかるように説得している。これは、昭和 20 年代から広がり始めた、家族みんなで子育てをとという方略から転換して、母親中心の子育てを推奨することが背景にあると思われる。

さらに、この書では、「登校拒否の子ども」の出現、「未熟な母親・過保護の子どもの問題」についても次のように指摘している。

——こうした子どもの母親たちについて考えるときには、母親の年齢や、家族関係などとともに、そのパーソナリティが問題になります。その一つには、分裂気質の、極端な神経質など、いわば病的なパーソナリティのばあいがあり、いま一つはこれが大部分なのですが、極端に未熟で自己愛的なパーソナリティの母親のばあいがあります。このタイプの母親は表面的にはよく適応して高い知性をもっているようですが、実際は未熟で、不安定で、社会的なつながりに乏しいのです。「すぐれた女性、妻、母」といったイメージを守ることに懸命であったり、自信が強いが真の人格的な独立や成熟に達していないで、正しい理解ができず、自然でやさしい母性的感情を欠いているのです。

こうした母親たちは、子どもを少しはなれたところから眺め見守る、ということが出来ません。いじくりまわしたり、保護を加えすぎたり、あるいは子どもを拒否したり、全く放任してかえりみななかったり、感情的な取扱をしがちなのです。……中略……愛情の与え方のまちがった、いわば消化不良にあたる子どもたちは、強い情緒不安定な子どもとなって、ノイローゼにも発展するおそれがあります。

いっぽう、愛情の与え方の不足は、心の栄養失調となり、非行となってあらわれてくるのです。——

このような「未熟な母親・過保護な母親」が出現してきた背景について、『子どもと家族関係』（1967、中野佐三、福村出版）では、次のように述べている。

——ところで、そのような一般論からすると、昨今の多くの家庭あるいは家族関係は、どうみても「受容」と「社会化」の釣合いが前者にずれているとしかみえません。「受容」にかたよりすぎ、それが時の流れとともにひどくなり、そして、それに比例して、「社会化」が後退しているようにみえるのです。

そこで、なぜそんなにずれてきたのであるかを考えてみるのですが、そうすると、およそ、次のようなことが考えられます。

民主主義は、戦後、われわれの血の犠牲で身につけるようになったもので、その民主主義に立って教育を考えるなら、その根本に子どもの欲するところを欲するがままにみたしてやるということをおこななければならないとされ、かくて、いわゆる子ども中心の教育思想が打ち出されたと思われるのです。民主主義に立つなら、われわれは、「個人の尊重を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成」（教育基本法）を期するということになります。

そして、「個人の尊重を重んずる」なら、子どもの欲するところは、これを抑えるべきではない、となります。

だが、その場合、民主主義に立つということをやっかりしていたら、どうでしょうか。子どもの欲するところを欲するがままにみたしてやる、ここのところに心を奪われていると、子どもを甘やかす教育になりかねません。そして、そうなっては、その筋道を踏みはずしたことになります。肝心なことは民主主義に立つということです。子ども中心ということも、民主主義に立っていてこそ、意味のあることなのです。

民主主義に立っての子ども中心なら、子どもも民主的社会の、まだ幼少ではあっても、一員であるべきだと考えられて、だから、子どもであっても、何をするにも民主的社会の一員として、また、その一員らしくすべきであると要求されるわけです。いいかえると、自分勝手は許されないのです。

したがって、そこでは、子どもの欲するところを欲するがままにみたしてやるというのは、個人の尊厳を重んずるからであって、決して好き勝手をさせる、ただ甘やかす、ということではないのであります。

で、昨今は、その根本のところ、つい、うっかりされているのではないと思われるのです。子どもの欲するところを欲するがままに満たしてやる、それが教育の要諦である、と、ここのところだけ心を奪われて、もっと肝心のところを、つい、うっかりしているのではないかと思うのです。

とにかく、そのようなことが、昨今、多くの家庭を、家族関係を「ずれ」させているように考えられるのです。子どもの欲するところは、それがなんであるかを問わず、ただ満たしてやるのが、その子の教育に根本的に大切なことであると思ひ込み、このため、この社会に生きる生き方を知らせることは欲求不満に通ずるのではないかと心配し、かくて、知らせることに臆病になっている、となって、「ずれ」たのであろう、と考えられるのです。

そして、このことは、また、わが国の民主主義のまだ日の浅いことを物語っているように思われます。そしてそのように日の浅いところに生産技術のめざましい進歩、経済の高度成長、これに伴う人口の都市への集中、これらのことが結びついて起こる生活様式の急激な変容、消費、レジャーといったことに傾いた生活、等々が、いっそうその「ずれ」を大きくしているのであると考えられるのです。——

この記述から、高度経済成長期の中で子育てが、個人尊重のあまり、結果的に甘やかしてしまふ方向へ移行していく社会背景が伺える。

さらにこの書籍では、新しい知識を吸収して子どもの教育に熱心な母親を「心理学ママ」と呼んでいたのに変わって、「教育ママ」さらには「教育パパ」なる用語で呼ばれるようになっていく。

——子どもの教育に熱心であることは、まさに、望ましいことです。しかし、それが「教育ママ」「教育パパ」と、ややさげすんでいわれるようになりますと、問題です。そして、昨今、そのことばをよく耳にいたします。——

なお、前述の『幼児の基礎能力の育てかた』でも、同様に「教育ママ」なる表現が使われてお

り、昭和40年代からこの用語が使われ始めたと推察できる。

そして、これは、昭和30年代前半から始まった「知識重視・管理強化」という教育の方向性が社会に定着し、さらに「能力主義・エリート養成」の方向に進もうとしている現象の中で、家庭教育が、その教育の方向性に引きずられていることを示している、象徴的な変化ではないかと考える。このような教育への熱心さを反映して書かれたと思われる書籍としては『才能は創造できる』(1967、光永貞夫、日本教文社)、『優良児を作る』(1967、谷口雅春、日本教文社)、『幼児の絵の見方』(1967、岡田清、創元社)がある。

このように教育が加熱していく中で、「知識重視・管理強化」は「落ちこぼれ」の問題を、「能力主義・エリート養成」は「校内暴力・体罰」の問題を生んだ。このような教育の諸問題の背景について『人間を育てる心—親子の姿と家庭のかたち—』(1967、庭野日敬、佼成出版社)では、次のように述べている。

——そうしたさむぎむとした世相がもっとも象徴的にあらわれるのは、青少年の世界においてであります。たとえば、新しい孤児の発生という現象があります。四十二年の五月現在の統計によれば、東京都の施設に収容されている約四千人の孤児たちのうち、真正の孤児は六割で、あとの四割というものが、家庭の不和や母親の家出などによる、両親健在の孤児だということです。前代未聞の現象です。

また、青少年の非行と犯罪の激増があります。四十二年六月に発表された白書によると、少年による恐かつ・窃盗・強盗は十年前に比べて四倍にふえたというのです。四割増というのならまだしも、四十割となると、もはやただごとではありません。つぎの世代を背負う少年たちがこのありさまでは、これからの日本はいったいどうなっていくのでしょうか。心配をとおりこして、一種の戦りつきえおぼえるのです。……中略……それゆえ、わたしは、日本全体の急速な工業化という変革があったにしても、大きな意味における教育が正しいありかたさえ保っておれば、けっしてこのような事態はおこらなかったとおもう

のです。ところが、学校教育は知識・技術の面にのみ偏向し、その欠陥を補うべき家庭教育にいたっては、ほとんどその方向さえも見失い、上級学校受験と安楽な世渡りを前提とした低い次元を、さ迷っているありさまです。一言にしていえば、功利主義が教育のほとんどすべてをおおい、人間らしい人間をつくるという教育の最大最高の目的がどこかへおき忘れられているのです。——

直接「校内暴力・体罰」について論じてはいないが、子どもたちの犯罪の原因を教育の偏向に求めており、その背景は同一のものと思われる。同じような論調は、『人間にくずはいない』(1967、金沢嘉市、あすなる書房)にもみられる。

#### 4 ま と め

昭和40年代に入って、それまでの教育に熱心な母親を「心理学ママ」と呼んでいた呼び名から、はっきりと「教育ママ」と呼ぶようになったようである。同時に、それまで子育てに心理学的観点を取り入れた結果として、子どもたちの発達の様子をとらえた上で、しつけや教育をしていくべきとの論調が多く書籍から読みとれた。そのひとつの現れとして、「三つ子の魂百まで」をキーワードとしながら、三歳までの育て方の重要性を論じる書籍が見られたことが挙げられる。そこには、母親は、自我発達を柱とした子どもの成長過程の理解の大切さと、けっして教え込むことだけが重要なことではないとの姿勢が論じられていた。これは、乳幼児期からの早期教育への警鐘と読みとれる。それ故、幼児期の子どもにとって「遊び」がいかに重要かを論じる書籍が、多くみられるようになったものと思われる。

また、昭和40年代にはいると、医学的視点から子どものからだの成長を論じる書籍も見られるようになってきた。それらの書籍は、昭和30年代から始まった「科学的育児」の延長として、母親向けの育児書として医学的立場から論じられているのが特徴である。

昭和40年代に入り、大塚(2005)が指摘した昭和30年代の課題であった「早期教育への警鐘」、「子どもの反抗に戸惑う母親の出現」への



提言がなされている書籍が多く見られるようになってきた。しかし、一方で教育に熱心すぎる母親への提言、逆に子育てが全く出来ない親の出現の指摘、三歳までの育て方が重要であることの指摘をする書籍など、昭和30年代にはあまり見られなかった現象を指摘する書籍も見られた。

さらに、昭和40年代中頃から40年代後半にかけてどのような状況になっていくのか、さらに分析を続けたい。

## 引用文献

- 1) 一甲絹子著 (1966) 2、3才児の教育 黎明書房 1-3
- 2) 伊藤 昇著 (1965) 家庭はこれでいいのか 有紀書房 20-21
- 3) 大塚健樹著 (2002) 戦後の育児書に見る育児方略—昭和30年代前半を中心に— 盛岡大学短期大学部紀要第12巻 (通巻第25号) 107-114
- 4) 大塚健樹著 (2005) 戦後の育児書に見る育児方略—昭和30年代後半を中心に— 盛岡大学短期大学部紀要第15巻 (通巻第25号) 33-40
- 5) 園原太郎・黒丸正四郎著 (1966) 三才児 日本放送出版協会 255-257
- 6) 高木俊一郎 (1967) 子どもの心とからだ 創元社 3-4、4-5、7-9
- 7) 庭野日敬著 (1967) 人間を育てる心 成出版社 1-3
- 8) 中野佐三著 (1967) 子どもの家族関係 福村出版 146-149、150
- 9) 野瀬寛頭著 (1965) 愛ときびしさの家庭教育 あすなろ書房 130-131
- 10) 松井公男著 (1966) 幼児の基礎能力の育てかた 誠文堂新光社 4-5
- 11) 松田道雄著 (1965) 私の幼児教育論 岩波新書 4-5
- 6) 毎日新聞社編 (1965) 人間形成ある家庭 光風社書房
- 7) 松田道雄著 (1965) 私の幼児教育論 岩波新書
- 8) 宮原健雄篇 (1965) 家庭教育増刊号 家政教育社
- 9) 阿部明子著 (1966) 0～3歳ママたちはこう育てた 童心社
- 10) 伊東挙位著 (1966) 幼稚園と家庭よい子を作る遊び 白眉学芸社
- 11) 一甲絹子著 (1966) 2、3才児の教育 黎明書房 1-3
- 12) 勝田守一・山住正巳・松田道雄著 (1966) 幼年期 岩波書店
- 13) 木下正一・中村仁吉・大塚昭二編 (1966) 乳幼児健康相談の実際
- 14) 小林重順・星野三雄編 (1966) 幼児の生活としつけ 鳳山社
- 15) 園原太郎・黒丸正四郎著 (1966) 三才児 日本放送出版協会
- 16) 早川元二著 (1966) 子どもの性格づくり 主婦の友社
- 17) 松井公男著 (1966) 幼児の基礎能力の育てかた 誠文堂新光社
- 18) 上沢謙二著 (1967) 新保育読本 恒星社厚生閣
- 19) 岡田 清著 (1967) 幼児の絵の見方 創元社
- 20) 金沢嘉市著 (1967) 人間にくずはない あすなろ書房
- 21) 小林さえ子著 (1967) よい友だちよい遊び 国土社
- 22) 鈴木 清・品川不二郎・宮城音弥編 (1967) 身体とくせ 明治図書
- 23) 高木俊一郎 (1967) 子どもの心とからだ 創元社
- 24) 詫摩武俊著 (1967) 性格はいかにつくられるか 岩波書店
- 25) 谷口雅春著 (1967) 優良児を作る 日本教文社
- 26) 中央幼児教育研究会編 (1967) 幼児心理学 学芸図書
- 27) 中沢次郎著 (1967) カウンセリングの原理と事例 誠信書房
- 28) 中野佐三著 (1967) 子どもの家族関係 福村出版
- 29) 庭野日敬著 (1967) 人間を育てる心 成出版社
- 30) 松石治子著 (1967) 新しい年少組の保育 ひかりのくに
- 31) 光永貞夫著 (1967) 才能は創造できる 日本教文社
- 32) 依田 明著 (1967) ひとりっ子・すえっ子 大日本図書

注：論文の性格上、発刊年順に記載

## 分析対象とした資料一覧

- 1) 伊藤 昇著 (1965) 家庭はこれでいいのか 有紀書房
- 2) 佐野勝男著 (1965) 性格の診断 現代心理学ブックス
- 3) 津守 真・磯部景子著 (1965) 乳幼児精神発達診断法 大日本図書
- 4) 野瀬寛頭著 (1965) 愛ときびしさの家庭教育 あすなろ書房
- 5) 早川元二著 (1965) 子どものしつけ 国土社